

英語会話教材におけるコミュニケーション方略の分析

平野 絹枝*・鈴木 武秀**・山田 智也***

1. はじめに

新学習指導要領（平成10年に中学校告示，平成11年に高等学校告示）の外国語の目標には、「実践的コミュニケーション能力（の基礎）を養う」という文言が記されている。現場の英語教師は，日々その目標の達成のため，試行錯誤を繰り返しているのが現状である。具体的には，一層コミュニケーション重視の傾向が強くなっている教科書の扱い方やコミュニケーション活動の工夫についてである。つまり，どのように教科書や提示されている活動を利用すれば「言語の実際の使用場面や言語の働きに十分配慮しながら，日常生活の身近な話題について情報や考えが交換できる能力（中学校学習指導要領）」、「単に外国語の文法規則や語彙などについての知識をもっていることだけでなく，実際のコミュニケーションを目的として外国語を運用できる能力（中学校学習指導要領解説－外国語編）」いわゆる「実践的コミュニケーション能力」を生徒に養うことができるのか，ということである。

同解説には，この目標の実現のため，具体的に次のことが明記されている。すなわち，「イ 聞くことの言語活動」に関しては，「(エ) 話し手に聞き返すなどして内容を正しく理解すること」の中で，「話し手に聞き返すなどして」とは，「分からないところをそのままにせず，何らかの意思表示をして活動を継続しようとする」(p. 14) ことを意味し，例として“Pardon?”，“I am sorry, but I can't hear you.”，“Would you please say that again?”などの表現を駆使してコミュニケーションをさらに継続できるようにすることの重要性を説いている。さらに，「ウ 話すことの言語活動」の「(エ) つなぎ言葉を用いるなどいろいろな工夫をして話が長くように話すこと」に関しては，「紋切り型の応答や一往復だけの言葉のやりとりで終わってしまうのではなく，会話が発展・継続できるようになるためには，そのための表現や技法を身に付けることも大切である」(p. 17) とし，「つなぎ言葉」の例として“Well”や“let me see”を挙げている。「いろいろな工夫」の具体例として，“I see”，や“Sure”などの表現で会話を円滑にすることを挙げている。

平野・鈴木（2005）は，上記解説に示されている表現や会話を持続させるための工夫が，コミュニケーション方略（以下CS）の使用を指すものであると主張している。CSとは，Færch and Kasper（1983）によると，「CSsは元来，特定の伝達上の目標を達成する上で，個人にとって問題となるものを解決するための潜在的に意識的なプランである。」(p. 36) ということができる。コミュニケーション上の困難に遭遇した際に，学習者自身が「別な言葉や表現で言い換え」たり，「相手の意図した意味内容を明確化するように要求」したりするなど，積極的に困難に取り組むすべを身につけることが重要である。このことに関連して，平野・鈴木（2005）は，「…“Strategic Competence”を向上させ，意図した意味内容を何とかして対話者に積極的に伝達するように努力する能力を育成することによって『errorとうまく付き合う』という考え方が，より建設的…」(p. 1) であろう，と述べている。

そこで本稿では，指導者がよりどころとするテキストにおいて，CSがどのように扱われているか，またどの程度豊富な種類のCSが盛り込まれているかを明らかにするため，日本の英会話教室で採用されているテキストの分析を行う。Iwai（2001）は，日本の検定教科書においては，CSの理論が効果的に加味されているとはいえ，CSの出現頻度は種類によってかなり偏りがある，と言うことを明らかにしている。また，平野・鈴木（2005）は，英会話教室で使用されているテキストにおいても同様のことが言える，と主張している。しかしながら，平野・鈴木は，分析した英会話教室のテキストが2社6冊に留まっており，さらに多くのテキストがCSの観点から分析される必要がある，と言う点についても提案している。この点に鑑み，本稿では，さらに1社3冊のテキストを加えて分析を行う。したがって，英会話教室のテキストがCSの観点から編纂されているか，と言う疑問に対してさらに確固とした答えを見

出すばかりでなく、教師がCSの使用法を指導するに当たり、そのための豊かな表現を資料として得ることができ、自然な会話に現れるCSの例を豊富に得ることができるという意味で、本研究は大変意義深い。そういった言語資料を得ることで、教師自身がCSの理論を組み込んだ活動を考案し、生徒に「実践的コミュニケーション能力」を養うことができるものとする。

2. これまでの教材分析研究の結果 (CSを中心として)

日本の中学校の教科書の分析、及び高等学校の教科書の分析結果については、表1に示した通り、系統的にCSの

表1 CSを中心とした教材分析研究の結果

	達川 (2000)	Faucette (2001)	Iwai (2001)	平野・鈴木 (2005)
目的	これまでの談話分析における知見をもとに、外国語学習者のコミュニケーション上必要な方略が、いかにして日本の高校生に示されているのか。	(1) どのコミュニケーション方略が選択したテキストの中で提示され、教育的に目的にかなう方略を含み、推奨されているか。 (2) どんな活動のタイプが紹介するまた実践するコミュニケーション方略に見え、理論上効果的な方法であるか。	(1) 日本の検定教科書はどれだけ系統的にCS研究から引き出された代表されるCS分類にある方略的表現を扱っているか。 (2) これらの教科書は、英語を方略的に使用することを奨励する練習をどれだけ含んでいるか。	(1) 自然な文脈でのCS使用の例を資料として提示し、英語教材開発の示唆を得ること。 (2) 中学校の英語科検定教科書と英会話スクールで使用されているテキストに出現するCSの頻度を比較し、教材開発に関する示唆を得ること。
分析教材	1998年度採択率上位8社8冊の高等学校検定教科書内から、方略の言語的手がかり(表現)を含むものを分析	40冊の教科書と教師用テキストの中から、42.5%にあたるCSを含む、17冊におけるCS分析	7社21冊(1, 2, 3学年)の中学校英語科検定教科書を本文とExerciseにおけるCS使用頻度に関して分析	2社6冊(初級, 中級, 上級)の英会話スクールのテキストを分析し、Iwai (2001)の中学校英語科教科書の分析結果と比較
CSの分類	*Starting a Conversation *Getting the Floor *Keeping the Floor *Introducing a Topic *Changing a Topic *Asking for Repetition *Asking for / Giving Clarification *Checking and Indicating Understanding *Breaking in / Interrupting *Taking Time for Thinking/ Hesitating *Breaking / Avoiding Silence *Closing a Conversation	Recommended Strategies to Teach *Approximation *Circumlocution/ Paraphrasing *Word Coinage *Appeal for Assistance Possibly Recommended *Foreignizing *Time-Stalling Devices Not Recommended to Teach *Topic Avoidance *Message Replacement *Message Abandonment *Non-Verbals *Borrowing	LEXICAL CS *Circumlocution *Approximation *Word-coinage *Literal translation REPAIRING CS *Self-rephrasing *Self-repair *Other-repair INTERACTIONAL CS *Appeal for help *Comprehension check *Asking for repetition *Asking for clarification *Asking for confirmation *Expressing INDIRECT CS *Use of fillers	ACHIEVEMENT L1-BASED *Code-switching *Literal translation L2-BASED PARAPHRASE *Word coinage *Circumlocution *Approximation *Restructuring *Exemplification INTERACTIONAL *Confirmation check *Clarification request *Comprehension check TIME-GAINING *Fillers
結果	・話題を変えるための表現は8社合計で14例しか出てこない。 ・反復を求める発話は10種類以上見られたが、まったく出てこないものも2社あった。 ・言語使用場面や機能については各社ともよく開発がなされているが、方略の表現が裏表紙や付録的な扱いであることが多い。	・この研究で最も一般的であった方略は4種類だけであった。 ・Circumlocutionとappeal for assistanceはCSに含まれるが、推奨していたword-coinageとapproximationが稀であったことは残念で、推奨しなかったabandonmentが2つのテキストに含まれたことは驚きであった。	・表現に偏りがあり、14種類の方略タイプのうち、8種類に関して各1冊において平均1回を下回っている。Fillersに関して、学習者がそのtime-gainingとしての機能を習得するために、適切な提示方法で示されていない。	・11種のCSの出現頻度にはかなり偏りがある。 ・中学校の教科書との比較では、Fillersは、英会話スクールのテキストにおいて極めて多かった。Literal-translationに関しては、日本の教科書のみ現れた。Circumlocutionは、日本の検定教科書より英会話テキストに若干多く出現していることが明らかになった。

理論を組み込んでいるものではなく、出現しているCSの種類もかなり偏ったものであることが示されている (Iwai, 2001; 達川, 2000)。また、海外で使用されているテキストを分析した Faucette (2001) も同様の見解を述べている (Iwai & Konishi, 2003)。さらに、日本の英会話スクールで使用されているテキストを分析した平野・鈴木 (2005) は、Iwai (2001) の分析結果と比較して、(1) Fillersの出現頻度が英会話スクールのテキストにおいてさらに多く出現している、(2) Literal translationに関しては、日本の検定教科書にのみ出現した、(3) Clarification requestに関しては、日本の検定教科書のほうに若干多く出現していた、(4) Circumlocutionについては英会話スクールのテキストに若干多く出現していた、という結果を明らかにしている。加えて平野・鈴木は、英会話スクールで使用されているテキストにおけるCSの扱われ方もSchool Bのテキストには“Communication Strategies”というコラムが設けられているが、全体的には、CSの理論が効果的に具現化された編纂には至っていない、と述べている。

3. 教材分析の目的

仕事や留学など、英語によるコミュニケーションに関する様々な目的を持った学習者が学ぶ、日本の英会話スクールで使用されているテキストにおいて、CSがどのように扱われているか、また、CSの分類に含まれる多様な方略がどの程度モデル会話の中で出現しているかを明らかにすることが本稿における教材分析の目的である。

多くの研究者が、CSの理論を明示的に導入し、編纂されている英語指導教材の少なさを指摘している (Faucette, 2001; 平野・鈴木, 2005; Iwai, 2001; Iwai & Konishi, 2003; 達川, 2000)。平野・鈴木 (2005) は、前節で示した通り、日本にある英会話スクールのうち、NOVAとAEONの2社が採用しているテキスト6冊 (各3冊ずつ) を分析し、それぞれのテキストに出現するCSのタイプと頻度を比較し考察している。しかしながら、そこでは統計的な比較検証が行われていない。また、分析に用いたテキストが少ない点も指摘される場所である。よって、本稿では平野・鈴木が分析した2社のテキストに、さらに1社 (3冊) を加えてそれぞれのテキストに出現するCSのタイプと頻度を統計的に比較する。

3.1 分析教材

平野・鈴木 (2005) が分析した日本の英会話スクール2社 (A, B) が採用しているテキストに、さらに同様の英会話スクール1社 (C) が採用しているテキスト3冊を加え、合計3社 (9冊) が採用しているテキストを本研究の分析教材とする。具体的には、以下に示す通りである。

- 1) School A (NOVA) の使用教材 (平野・鈴木, 2005)
 - (a) QUEST Access HARTLEY & VINEY. New York: Oxford University Press. (以下QA…初級用)
 - (b) QUEST Build HARTLEY & VINEY. New York: Oxford University Press. (以下QB…中級用)
 - (c) QUEST Complete HARTLEY & VINEY. New York: Oxford University Press. (以下QC…上級用)
- 2) School B (AEON) の使用教材 (平野・鈴木, 2005)
 - (a) CHECKPOINT. Roundup Lesson. Tokyo: AEON Institute of Language Education. (以下CP…初級用)
 - (b) Viewpoint. Roundup Lesson. Tokyo: AEON Institute of Language Education. (以下VP…中級用)
 - (c) Focus Point. Roundup Lesson. Tokyo: AEON Institute of Language Education. (以下FP…上級用)
- 3) School C (GEOS) の使用教材 (本研究)
 - (a) Sprint 5Y, 5X. Tokyo: GEOS Corporation. (以下GA…初級用)
 - (b) Sprint 7Y, 7X. Tokyo: GEOS Corporation. (以下GB…中級用)
 - (c) Sprint 8Y, 8X. Tokyo: GEOS Corporation. (以下GC…上級用)

3.2 CSの分類

平野・鈴木 (2005) は、Tarone (1977), Bialystok (1983), Færch and Kasper (1983), Dörnyei (1995), 及びIwai (2001) を参考にして、表2に示す11種類のCSについて分析を行っている。CSタイプの選択に関して、平野・鈴木 (2005) は、英語教育の目標である「実践的コミュニケーション能力の育成」ということを考慮し、意図した意味内容を積極的に伝えようとする達成方略 (achievement strategies) の分析を行った、と述べている。本稿において

も平野・鈴木の教材分析と主旨を同じくするものであるので、彼らのフレームワークの下、英語会話教材の分析を行う。

表2 CSの分類（平野・鈴木，2005）

Communication Strategies			
ACHIEVEMENT			
L1-BASED	L2-BASED		
	PARAPHRASE	INTERACTIONAL	TIME-GAINING
Code-switching	Word coinage	Confirmation check	Fillers
Literal translation	Circumlocution	Clarification request	
	Approximation	Comprehension check	
	Restructuring		
	Exemplification		

3.3 分析の方法

表2で示した分類（平野・鈴木，2005）により、平野・鈴木が分析した各テキストに出現するCSに関するデータ（資料A参照）と、本稿のために新たに分析した1社分のテキスト（3冊）に関するデータ（表4）を基に、その出現頻度をスクール別に調べた。3社のテキストのCS出現頻度を比較する際、平野・鈴木（2005）に従い、小度数のもの（Literal translation, Word coinage, Approximation, Exemplification, Comprehension check）をはぶいて、 3×6 の χ^2 検定を行った。

4. 結果と考察

平野・鈴木（2005）は、2社のテキストに出現するCSの頻度について以下の報告をしている（出現頻度に関しては資料A参照）。つまり、School Aの教材に関しては、(1) 会話場面が海外におけるネイティブスピーカー（NSs）の会話設定であった、(2) Code-switching, Literal translation, 及びWord coinageが出現しなかった（L1-based strategies が皆無）、(3) 最も多く出現したCSは、Fillersであった。しかも、全体的なCS出現頻度は幾分かずつ低下しているにもかかわらず、レベルが初級から中級に移った際もその出現頻度は増加していた、(4) Restructuringの出現頻度は、初級用テキストでは皆無であったが、中級用テキスト）では14回、上級用テキストでは13回という出現が確認された、(5) Fillersに次いで出現頻度が高かったのは、Confirmation check, Circumlocution, Clarification requestであった、という点である。

School Bに関しては、(1) 留学先での日本人とNSsの会話設定である、(2) Paraphraseに含まれるCSに比べ、Fillers及びInteractional strategiesの使用が多い、(3) L1知識の活用が義務となるCSの一つであるCode-switching（3冊で計21回）が出現している、(4) 最も多く出現したCSは、Fillersであった、(5) “Conversation Strategies (CP)”, “Communication strategies (VP, FP)”というコラムが設けられている、という5点である。次に、新たに加えたSchool Cの特徴に関してSchool A及びSchool Bにおいて示された特徴と比較しながら分析する。

4.1 School C (GEOS) のテキストの特徴の分析

School Cのテキスト（3冊）の冒頭には、当該テキストで学習するにあたっての主眼が提示されている。つまり、初級テキストでは内容を100%理解する必要はなく、会話を感覚的に捉えることが重視されている。中級テキストでは会話の要点だけではなく、より正確に詳細まで聞き取れることが示されている。そして上級では、NSのような自然な表現力を身につけるために、動詞句やイディオム、比喩表現、婉曲語法（本稿におけるCircumlocution）を使うことが重要である、としている。

まず、全体的な特徴として、テキストの会話のほとんどがNSsと日本人との対話であるという点が挙げられる。様々な話題について対話が行われ、実際の会話でも起こりうる、会話の断絶が発生する場面が組み込まれていることが見てとれる。また、この初級テキストでは、モデル会話の後に設定されている練習において、学習者がCode-switchingを行わないように、明確に外来語や借用語を示している。中級テキストではFillersの種類が提示されていて、上級ではCircumlocutionで使用できる形容詞の提示と語順についても示されていることにも注目したい。

次に、各CSの分類に即した量的な特徴について分析する（表3）。第1に、最も出現頻度が多かったCSはFillers（1冊につき平均305.00）で、次いでClarification request（平均28.33）及びConfirmation check（平均25.33）であった。このテキストでは、全体的にFillersの出現頻度が高いが、特出して中級テキスト（GB）に多いのは、明示的にFillersに使用できる多様な表現が紹介されているためであると考えられる。また、どのレベルのテキストにもCode-switchingとLiteral translationが出現しなかったことに関しては、このSchool Cのテキストで目標としているCS使用が、L1-basedの方略ではなく、L2-basedの方略であることがわかる。第2に、中級（GB）と上級のテキスト（GC）では初級のテキスト（GA）に比べて、明らかにL2-based strategyに分類されるParaphraseの頻度が高くなっている。このことは、Exemplificationが中級から上級にかけて多いことを含め、学習者がある程度の単語力を持っていることを想定して構成されているためであると考えられる。第3に、特に初級のテキスト（GA）で、L2-based strategyの中でInteractional strategyに分類されるConfirmation checkの頻度が顕著に高く（40回）、またClarification requestも他のテキストよりも比較的多い（33回）ことがわかる。初級学習者を念頭においたテキストであることを鑑みると、学習者自身の語彙力・表現力に頼る以上に、対話者に対して能動的に働きかけることで会話を続けることを推奨していると言える。最後に、3冊すべてのテキストにおいて、Interactional strategyに分類されるConfirmation checkとClarification requestの頻度が多いということが表3と表4に示されたデータより明らかになった。したがって、School Cのテキストでは、確かにParaphraseも使用されているが、対話者との意味交渉により会話を継続しようとするInteractional strategyが多いことは非常に興味深い。

それでは、一体どの英会話スクールのテキストにおける、どのタイプのCSが多く（あるいは少なく）出現しているのか、ということを経験的に分析する。

表3 英会話スクールC（GEOS）のテキストで扱われているCSの出現頻度及び3社全体の出現頻度

CS/Book	School C				School A, B, C		
	GA	GB	GC	小計	平均 (小計/3)	3社合計 (9冊)	平均 (3社合計/9)
Code-switching	0	0	0	0	0.00	21	2.33
Literal translation	0	0	0	0	0.00	0	0.00
Word coinage	0	3	0	3	1.00	3	0.33
Circumlocution	9	7	10	26	8.67	138	15.33
Approximation	0	2	3	5	1.67	16	1.78
Restructuring	0	4	1	5	1.67	32	3.56
Exemplification	1	5	8	14	4.67	23	2.56
Confirmation check	40	16	20	76	25.33	226	25.11
Clarification request	33	25	27	85	28.33	194	21.56
Comprehension check	0	3	1	4	1.33	11	1.22
Fillers	182	463	270	915	305.00	1,818	202.00
Total	265	528	340	1,133	376.67	2,482	275.78

4.2 School A, School B及びSchool Cのテキストの統計的比較

表4、及び表5に示した χ^2 検定の結果から、CSの出現頻度の偏りが有意であることが示された（ $\chi^2(10) = 317.89, p < .01$ ）。表4は、分析の対象とした3社（9冊）のテキストに出現した6種類のCSの出現頻度（実測値及び%）を示している。また、6種類のCSの選定については、平野・鈴木（2005）に従い、3（英会話スクール3社） \times 6（CSのタイプ）の χ^2 検定を行った。残差分析の結果から、School BのテキストはCode-switchingが有意に多かった。Circumlocutionに関してはSchool Aでは有意に多く、逆にSchool B, Cのテキストでは有意に少なかった。Restructuring, Confirmation checkはSchool Aで有意に多く、School Cでは有意に少なかった。Clarification requestはSchool Bで有意に出現頻度が低かった。3冊のテキストで、実際度数のみを見ると他のCSに比べて圧倒的に出現頻度が高かったのがFillersであるが、School Cにおいて有意に多く、それに対してSchool Aでは有意に少なかった。以上から、School Aのテキストでは学習者に、L2-basedの方略の中でも、Fillersで時間を稼ぐことよりもRestructuringやConfirmation checkで会話を維持し、Circumlocutionの使用を促し、言語知識を得る機会を増やしてい

くことを重視していることがわかる。School Bのテキストでは、Code-switchingを活用して会話中の困難を打開しようとする場面を設けている。L1-basedの方略においてのみ有意差が生じたという点から、初級学習者に焦点を当てたテキスト構成となっていると言える。School Cのテキストでは他のテキストと違い、Code-switching, Circumlocution, Restructuring, そしてConfirmation checkが有意に少なかった。

表4 英会話スクールテキスト (School A, School B及びSchool C) のCSの出現頻度の比較

	School A (NOVA)		School B (AEON)		School C (GEOS)	
	実測値	実測値/Total (%)	実測値	実測値/Total (%)	実測値	実測値/Total (%)
CS	0	0	21	9.1	0	0
CL	108	9.9	4	1.7	26	2.3
RS	27	2.5	0	0	5	0.4
CC	123	11.3	27	11.6	76	6.9
CR	99	9.1	10	4.3	85	7.7
FL	733	67.2	170	73.3	915	82.7
Total	1,090	100.0	232	100.0	1,107	100.0

Note. Code-switching (CS); Circumlocution (CL); Restructuring (RS); Confirmation check (CC); Clarification request (CR); Fillers (FL).

表5 表3の各セルの期待度数と調整された残差

	School A (NOVA)			School B (AEON)			School C (GEOS)		
	実際度数	期待度数	残差	実際度数	期待度数	残差	実際度数	期待度数	残差
CS	0	9.42	-4.15**	21	2.01	14.16**	0	9.57	-4.21**
CL	108	61.93	8.12**	4	13.18	-2.74**	26	62.89	-6.49**
RS	27	14.36	4.52**	0	3.06	-1.85	5	14.58	-3.42**
CC	123	101.42	3.03**	27	21.59	1.29	76	103.00	-3.79**
CR	99	87.06	1.80	10	18.53	-2.17*	85	88.41	-0.51
FL	733	815.82	-7.79**	170	173.64	-0.58	915	828.54	8.12**

* $p < .05$, ** $p < .01$

また、図1は、3社のテキストに出現したCS (検定の対象とした9種類) の頻度数の割合を示している。この図からも3社のテキストにおいて、Fillersの出現頻度がかなり多いことが分かる。このことは、平野・鈴木 (2005) が指摘している内容と矛盾するものではない。Code-switching (CS) に関しては、School AとSchool Cは同様の傾向を示しており、School Bにおいてのみ他の2社よりも若干出現頻度が高い。さらに、Circumlocution (CL) については、School BとCは同様の傾向を示しており、School Aにおいてのみ他の2社よりも若干出現頻度が高い。その他の方略については、3校ともほぼ同じ傾向を示していることが明らかである。Code-switchingについて、School AとSchool Cのテキストにおける出現頻度が低いのは、次の理由が考えられる。つまり、この2社のテキストが学習者の母語の使用を避けさせることを意図していると言える。また、Circumlocutionの全体に対する割合がSchool Aにおいて大きいことに関しては、School Aが学習者に高い言語知識を身につけさせようとする意図がうかがえる。このことに関連して、Salomone and Marsal (1997) は、言語知識を高める活動としてCircumlocutionの指導を取り入れることの必要性を説いている。また、Willems (1987) は、paraphraseの指導によって学習者自らが言語を学ぶ機会を得ることができると主張している。

総じて、平野・鈴木 (2005) が指摘するように、英会話スクールのテキストに出現するCSの頻度について、かなりのばらつきがあると言える。さらに、Fillersの出現頻度が他のCSに比べてかなり多いことから、英会話スクールでは、英語によるコミュニケーションを持続させるため、時間を稼ぎ、次の発話を準備することの重要性が暗示的に指導されていることがうかがえる。特に、School Cでは、先述したように、Fillers使用の重要性が明示的に指導されていることは注目に値する。また、このことがSchool CにおけるFillers使用頻度を高めていることは言うまでもない。

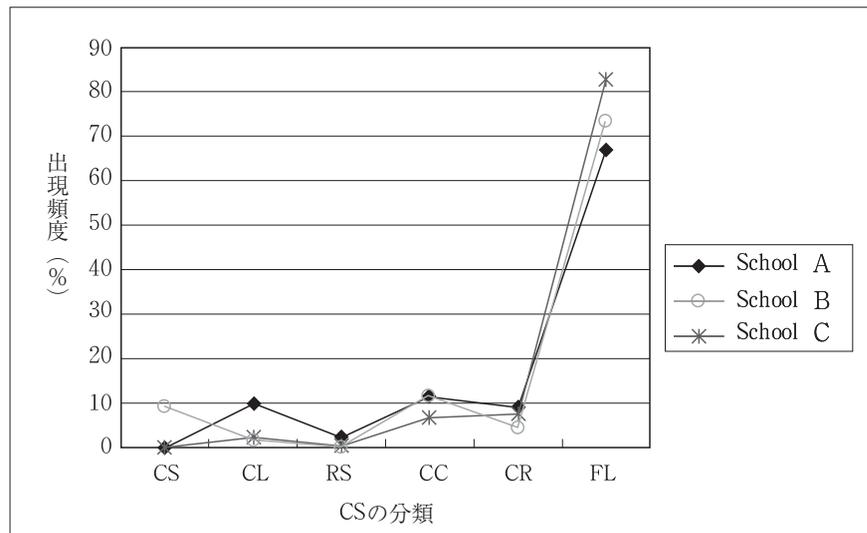


図1 3社のテキスト中の各CS出現頻度比較

5. 結論

本研究では、英会話スクールA, B, 及びCのテキストに出現したCSの偏りは有意であったことが明らかとなった ($\chi^2(10)=317.89, p<.01$)。このことは、平野・鈴木 (2005) が報告している結果とほぼ一致する。しかも、新たにテキストを加えて分析したことによって、平野・鈴木 (2005) の主張を裏付ける結果となった。その詳細については、以下の通りである。Circumlocution, Restructuring, 及びConfirmation checkに関して、School Aのテキストにおいて有意に多く出現した。School Aのテキストは、学習者が自身の母語を使用せず英語を使用し、問題を解決できるように編纂されていると考える。もちろん、School Aの英会話スクールの意図 (学習者のL1知識を活性化させず、積極的に英語で問題解決を行わせること) がうかがえる。Code-switchingに関して、School Bのテキストにおいて有意に多く出現した (School A及びSchool C: 0回; School B: 21回)。実測値からも明らかであり、学習者にとって自然な会話場面の例示がNS-NSの会話なのか、NS-NNSの会話なのか、と言う問題にもつながるが、School Bにとっては後者を主眼に置いていると言えよう。さらに、School Cに関しては、Code-switching, Circumlocution, Restructuring及びConfirmation checkに関して、有意に少ないことが示された。しかし、Fillersの出現頻度に関しては、有意に多いことが示された。このことから、School Cは、「ネイティブ・スピーカーのような自然な表現力をつけること」という目標を達成するため、Fillersの効果的な使用を重要視していると考えられる。さらに、そのための様々な表現についても明示的な指導が行えるように構成されている。また、図1に示すように、3社のテキストに出現したCSのうち、統計的な分析の対象とした6種類がCode-switchingとCircumlocutionを除いては、同様の頻度傾向を示していることが明らかとなった。

全体として、統計的に有意差が示されたCSの出現頻度と平野・鈴木 (2005) で報告されている内容に矛盾点が生じなかったことから、School A, School B, 及びSchool CのテキストにおけるCSの出現頻度比較について、平野・鈴木 (2005) の主張を裏付ける結果となった。つまり全体的にFillersの出現頻度が非常に多く、さらにインタラクションに関わるCSについても多く使用されていることが示された。また、母語に依存するのではなく目標言語の使用を促すCSを採用している。よって、教室環境においてもFillersの使用を含めて、L2-basedのCSが意図的に指導される必要性が示唆された。また、インタラクションのある活動を設定し、Confirmation checkやClarification requestなど、互いに意味の交渉を行うようなCSの使用方法を訓練する必要がある。そのためにも、本稿で示したCS使用のための豊富な表現が検定教科書においても採用されるべきであろう。さらに、そういった表現に関する知識を教師自身が持っているべきことは言うまでもない。

今後の研究課題として、平野・鈴木 (2005) は、会話場面とCSタイプの関係や“Exercise”におけるCSトレーニングに関する調査の必要性について挙げている。本稿では、次の点について新たに今後の課題として付け加えたい。すなわち、どのような表現形式を用いたCSが出現しているか、という点である。例えば、平野・鈴木が提示した資料では、School Aで出現したConfirmation checkの例文として次の (1) を挙げている (資料B参照)。

(1) A : Well, my daddy is athletic.

B : *Athletic*?

平野・鈴木 (2005, p. 10)

つまり、この例では、話者の発話中で聞き手が理解できなかった単語を1単語のみのrising intonationで聞き返す手法が採られている。このような例がどれだけ存在するか、その他のCS表現についても調査することで、教師が指導で例示する際の参考として利用できるものと考え。また、教師がもつべき知識として、どのような表現形式のCSがあるかを把握していることは、より自然なCS使用を指導することにつながるものと考え。さらに、熟達度によって使用されるCSの頻度に差異があるということ (Bialystok, 1983), また、熟達度が上がるにつれてCSの使用頻度が下がると言うこと (Labarca & Khanji, 1986; Paribakht, 1985; Poullisse & Schils, 1989) も明らかにされているが、これらの事実が英会話スクールのテキストの編纂に生かされているか、ということについて調査される必要がある。今後にもさらに多くのテキストについてCSがどのように扱われているかを調査し、本研究で明らかにされた点について確固とした示唆を得たいと考える。

参考文献

- Bialystok, E. (1983). Some factors in the selection and implimentation of communication strategies. In C. Færch & G. Kasper (Eds.), *Strategies in interlanguage communication* (pp. 20-60). Harlow, England: Longman.
- Dörnyei, Z. (1995). On the Teachability of Communication Strategies. *TESOL Quarterly*, 29, 55-85.
- Færch, C., & Kasper, G. (1983). Plans and strategies in foreign language communication. In Færch, C. & Kasper, G. (Eds.), *Strategies in interlanguage communication* (pp. 20-60). Harlow, England: Longman.
- Faucette, P. (2001). A pedagogical perspective on communication strategies: Benefits of training and an analysis of English language teaching materials. *Second Language Studies (University of Hawaii)*, 19, [Online] Available at: http://www.hawaii.edu/slsuhwpsl/on-line_cat.html
- 平野絹枝・鈴木武秀. (2005). 「英語教材分析 ―会話教材におけるコミュニケーション方略を中心にして―」『教育実践研究 第15集』 1-10.
- Iwai, C. (2001). Analysis of junior high school English textbooks from the perspective of communicative competence. *Annual Review of English Language Education in Japan*. 13, 31-40.
- Iwai, C. & Konishi, K. (2003). Theoretical controversies and pedagogical values in teaching communication strategies. *CASELE Research Bulletin*, =wa33, 111-120.
- Labarca, A., & Khanji, R. (1986). On communication strategies: Focus on interaction. *Studies in Second Language Acquisition*, 8, 68-79.
- 文部省. (1999). 『中学校学習指導要領―外国語編』東京：東京書籍.
- 文部省. (1999). 『高等学校学習指導要領―外国語編』東京：東京書籍.
- 文部省. (1999). 『中学校学習指導要領 (平成10年12月) 解説―外国語編―』東京：東京書籍.
- 文部省. (1999). 『高等学校学習指導要領 (平成11年12月) 解説―外国語編―』東京：東京書籍.
- Paribakht, T. (1985). Strategic competence and language proficiency. *Applied Linguistics*, 6, 132-146.
- Poullisse, N., & Schils, E. (1989). The influence of task- and proficiency-related factors on the use of compensatory strategies: A quantitative analysis. *Language Learning*, 39, 15-48.
- Salomone, A., & Marsal, F. (1997). How to Avoid Language Breakdown? Circumlocution! *Foreign Language Annals*, 30, 473-484.
- Tarone E. (1977). Conscious communication strategies in interlanguage: A progress report. In H. D. Brown, C. A. Yorio & R. C. Crymes (Eds.), *On TESOL '77 (pp. 194-203)*. Washington: TESOL.
- 達川奎三. (2000). 「コミュニケーション方略は教科書でどのように扱われているか」『中国地区英語教育学会研究紀要』, 30, 255-264.
- Willems, G. (1987). Communication strategies and their significance in foreign language teaching. *System*, 15, 351-364.

資料A 英会話スクールの各テキストで扱われているCSの出現頻度 (平野・鈴木, 2005, p. 6)

CS/Book	School A					School B					合計	平均 (合計/6)
	QA	QB	QC	小計	平均 (小計/3)	CP	FP	VP	小計	平均 (小計/3)		
Code-switching	0	0	0	0	0.00	5	12	4	21	7.00	21	3.50
Literal translation	0	0	0	0	0.00	0	0	0	0	0.00	0	0.00
Word coinage	0	0	0	0	0.0	0	0	0	0	0.00	0	0.00
Circumlocution	49	44	15	108	36.00	0	1	3	4	1.33	112	18.67
Approximation	5	3	1	9	3.00	0	2	0	2	0.67	11	1.83
Restructuring	0	14	13	27	9.00	0	0	0	0	0.00	27	4.50
Exemplification	3	5	0	8	2.67	0	0	1	1	0.33	9	1.50
Confirmation check	55	30	38	123	41.00	18	1	8	27	9.00	150	25.00
Clarification request	40	39	20	99	33.00	1	5	4	10	3.33	109	18.17
Comprehension check	1	5	1	7	2.33	0	0	0	0	0.00	7	1.17
Fillers	283	290	160	733	224.33	58	66	46	170	56.67	903	150.50
Total	436	430	248	1,114	371.33	82	87	66	235	78.33	1,376	229.33

資料B 具体的に使用されているCS表現の抜粋 (School A (NOVA) の場合) (平野・鈴木, 2005, p. 10)

スクール	テキスト	CS分類	例 文
School A (NOVA)	QA QB QC	Circumlocution	—About a marriage counselor— <i>A marriage counselor helps married couples to talk about their problems and to solve them.</i>
		Approximation	A: What are latrines? B: <i>Toilets.</i> I've never had to clean toilets.
		Restructuring	<i>"I have studied English since.....for five years in France."</i> <i>"Can I....I mean, could I....uh....may I have the...."</i>
		Exemplification	<i>"I like horror movies....Frankenstein and Dracula."</i> , <i>"....the major appliances...new stove, refrigerator, dishwasher,"</i>
		Confirmation check	A: Well, my daddy is athletic. B: <i>Athletic?</i>
		Clarification request	<i>"What?", "Pardon me?", "Excuse me?", "Sorry?", "Eh?", "Huh?", "What do you mean?"</i> ,
		Comprehension check	<i>"....., O.K.?", "You know what I mean?"</i>
		Fillers	<i>"Well..", "You know....", "Actually..", "I mean..", "Gee..", "You see....", "Let's say...", "Let me see..", "In my opinion..."</i>

資料C 具体的に使用されているCS表現の抜粋 (School C (GEOS) の場合)

スクール	テキスト	CS分類	例 文
School C (GEOS)	GA GB GC	Circumlocution	(1) <i>Do you see that woman in the corner over there? The one who has long hair. She's wearing the black sweater.</i> (2) <i>I'm not tasting that. It stinks. I don't care if it is ice cream. It's a fruit that I remember smelling almost as soon as we arrived in Singapore. The big spiky one that's yellow inside.</i>
		Approximation	(1) <i>I mean Bach, Mozart, that kind of thing, Western classical music.</i> (2) <i>Family problems like abuse</i> are often at the root of their violence. (3) <i>It's like</i> being in the army, isn't it?
		Restructuring	<i>It's just that...er...like in the inner city there..., But, nothing but..., ...don't you think that was a little bit...er...like...pooh, too gruesome?</i>
		Exemplification	The health food stores have quite a number of interesting products <i>like soya milk, tofu burgers, and granola.</i> You'll rarely hear men use words <i>like "gorgeous," "divine," or "lovely."</i>
		Confirmation check	(1) <i>Surfing the Net?</i> (2) <i>You mean like that face on Mars?</i> (3) <i>Does that mean we'll only be doing four hours of overtime?</i> (4) A: <i>I'm pretty sure we'll be able to retrieve the data.</i> B: <i>The data?</i> (5) A: <i>He's wearing a purple suit and yellow beret!</i> B: <i>... A purple suit and yellow beret?</i> (6) <i>You mean ...?</i> (7) <i>Does that mean...?</i>
		Clarification request	<i>A search what? What's the difference? What rumors? Could you start off by telling us what exactly "homeopathic medicine" is?</i>
		Comprehension check	<i>But, don't even think I'll be changing any diapers, O.K.?</i>
Fillers	<i>Erm, well, you know, Um, ah, Mm, Aargh, Now, look here, look, I mean, Look, guess, See guys, actually, Hm, then, Say, Mm...year, Anyway, I guess, Let's see, I told you, Besides, After all, ...though, The thing is..., I bet, I think it is fair to say that, it seems, to me at least that, let me see, I don't know but, You see, watch, Let me check, Frankly, I'm told, Uh...actually, I don't have a place to stay yet. Of course, I'm with you on that, but...hmm...I do think it's a little dangerous to allow parents to...uh...choose things like gender or physical appearance.</i>		